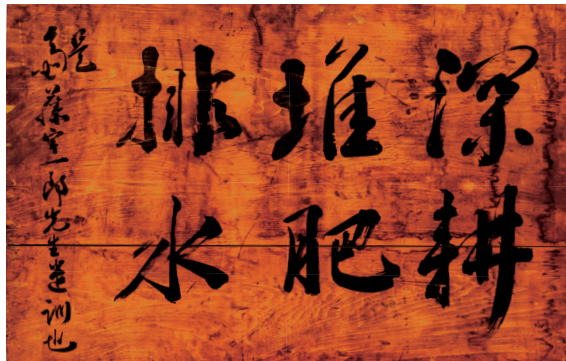


大還暦 乾田馬耕から120年 農聖 齋藤宇一郎先生を偲んで

にかほ市が誇る郷土の偉人、齋藤宇一郎、齋藤憲三、白瀬轟、池田修三たち。偉人特集では彼らを後世に継ぐ人たちにスポットをあてその想いを紹介します。

農業三是（齋藤宇一郎記念館展示）



昭和47年（1972）、仁賀保公園で行われた齋藤宇一郎記念会、財団法人設立30周年記念行事の様子



明治35年（1902）頃の馬耕大会



乾田馬耕記念碑（寺田神明社境内）



近代農業の幕開け

秋田の近代農業の幕開けを伝える、平沢地区で撮られた貴重な写真。明治33年（1900）、農商務省を辞めて帰郷した齋藤宇一郎が最初に手掛けたのが科学的な農耕だった。馬耕講習会が幾度も開催され、秋田の近代化農業がここから本格的に始まった。その結果、5年後には膝や腰までぬかるんでいた湿田の90%が乾田へと変わった。

明治35年（1902）、由利郡農会長となった宇一郎先生は先進地九州・福岡より、佐田直次郎、金子吉三郎、吉岡護郎、毛利新造の4氏を招聘。仁賀保、亀田、本荘、矢島にそれぞれ配属し、馬耕技術を始める農耕一般の指導にあたらせた。仁賀保に配属された佐田直次郎は、小出村の指導にあたり、三田市、寺田を中心に全村の指導に尽力した。寺田地区の神明社境内には、彼の功績を讃える記念碑が立っている。

石川理紀乃助（1845～1915）

潟上市の篤農家で明治から大正期の農業指導者。農村の更生、農家の救済、農業の振興に尽力した。秋田県種苗交換会の先覚者である。

森川 源三郎（1845～1926）

秋田市の篤農家で秋田県勲業掛となり農事改良に尽力。石川らと農事奨励のため九州を巡回し農民指導に尽力。後に秋田県農会長を務めた。

乾田馬耕が普及し始めた明治35年（1902）には、県が耕地の整理事業に乗り出し、翌年には小出村が率先して耕地整理組合を組織しました。結果、分散していた田地が集中し、水路や道路の利便性が良くなるなど、能率化の点で優れていたことが、さらに乾田馬耕を後押しします。宇一郎先生ら先人の汗と英知による明治・大正の農業改革は、この地を良質米の産地しての名声を高めさせるとともに、その後の農業の近代化、機械化など社会情勢の激変にも対応できる農業基盤の礎となりました。本号では、乾田馬耕の本格導入から今年で120年目の大還暦という節目を迎えることを機として、宇一郎先生の農業三是「一、深耕一、堆肥一、排水」を後世に伝える齋藤宇一郎記念会・荘司範彦会長および五十嵐公子前事務局長から、偉人を後世に継ぐ想いを伺いました。

秋田の三大農聖 乾田馬耕から百二十年

平

年であれば、7月12日、仁賀保・齋藤神社に響き渡る「齋藤宇一郎先生を讃へる歌」。今年は未だ収束の見えない新型コロナウイルス感染症の影響により、園児や児童の奉納相撲大会の中止に伴い、称賛歌も聞くことはできません。農工一体を唱え、この地に確固たる産業基盤である株式会社TDKを創設した齋藤憲三の父であり、石川理紀乃助、森川源三郎とならび秋田の三大農聖と称される齋藤宇一郎。慶応2年（1866）平沢村に生まれ、東京帝大卒業後、明治学院教授を経て農商務省に勤務。明治32年（1899）父・茂介の死で帰郷し、その後湿田から乾田への改革や耕地整理に尽力します。明治33年（1900）、本格的な乾田馬耕の導入により、耕起量も1日2畝から1日1反歩以上と飛躍的に向上、収量も1反歩3俵程度から6俵以上に増収するなど、地域農業発展への多大なる功績から農村指導の巨星と呼ばれるようになります。

秋田の近代農業の幕開けを伝える、平沢地区で撮られた貴重な写真。明治33年（1900）、農商務省を辞めて帰郷した齋藤宇一郎が最初に手掛けたのが科学的な農耕だった。馬耕講習会が幾度も開催され、秋田の近代化農業がここから本格的に始まった。その結果、5年後には膝や腰までぬかるんでいた湿田の90%が乾田へと変わった。